



名寄市立大学の窓から

知への誘い

vol.87

昭和60年の年金大改正と障害基礎年金の誕生

保健福祉学部 社会福祉学科 教授 高阪 悌雄



人生の中で労働による稼得収入が、生計の中心となる期間は長くても40年前後ではないでしょうか。老齢や障害によって働けなくなったり、暮らしを支える手段の一つに、公的年金制度があります。わが国の公的年金制度は二階建ての構造となっており、一階部分が全国民加入の国民年金、二階部分は被用者年金で平成27年から厚生年金に一元化されました。こうした現在の公的年金の基本構造は、昭和60年の年金大改正で誕生します。それまでは、国民年金や厚生、共済年金などは独自に加入者から保険料を集め、各制度ごとに給付を行うなど、独自運営を行ってきました。ところが、昭和50年代には国民年金の財政が窮乏し始めます。日本の産業構造の転換で、国民年金の加入者である農林水

産業等の第一次産業従事者が大幅に減少、収支の均衡が崩れ始めたためです。そのため昭和60年の年金大改正では、国民年金を全国民加入の基礎年金とし、当時現役労働者が多かった厚生年金や共済年金から基礎年金への財源移転を通じて、国民年金制度の存続を図ります。これが昭和60年の年金大改正で現在の二階建て構造の出発点となります。当時、「第二臨調」という財政健全化施策の提言を政府に行う審議会がありました。会長は「メザシの土光」と言われ質素倹約を掲げ、国民からの高い人気を集めた土光敏夫という財界人でした。この土光臨調は、年金給付削減や国鉄等の公営企業の人営化推進など、多くのコストカット政策を政府に提言します。こうした緊縮財政下での改革だったた

め、昭和60年の年金大改正では、年金の期待給付額は大幅に下げられたのです。こうした中で誕生したのが、現在の障害基礎年金制度です。保険は、保険料の拠出をして給付があるという基本的な原則の上で成り立っています。しかし障害基礎年金制度では、幼いころから国民年金の障害認定基準に該当する障害のある方が20歳になった段階で、国民年金の加入期間である20歳を超えて事故等で障害を持った方と同額の給付が行われます。つまり、保険料無拠出の方の給付額を拠出した方の給付額にまで引き上げたのです。こうした仕組みは保険の原則を超えるものであると、制度設計を行った厚生省年金局内でも若手の官僚を中心に多くの異論ができました。この制度の誕生を強く導いたのが当

時年金局長であった山口新一郎という人でした。山口は昭和60年の年金大改正法案の国会審議途中にガンのため死去します。山口は障害基礎年金の無拠出と拠出を統合させる理論的根拠を明示していましたが、その死により、その根拠が十分に伝わらないまま制度運用がスタートします。この山口に協力し、制度成立に向けた取り組みを進めたのが厚生省の更生課長であった板山賢治という人でした。板山は「親元や施設を出て地域で自立したい、そのため所得保障を改善してほしい」という幼いころからの重度障害者の切実な声に真摯に向き合います。板山は車椅子の国会議員であった八代英太と共に、こうした重度障害者の切実な声を大蔵大臣（現財務大臣）や厚生大臣など、多くの国会関係者と直接面会させることでつないでいきます。このように障害当事者、官僚、政治家の大きな尽力の中、幼いころからの障害者にも給付される障害基礎年金は誕生します。

大学図書館へようこそ！

年度末を迎えました。大学の卒業式は3月19日(水)に行われます。毎年、名寄市の図書納入組合様より図書カードをいただいていますので、卒業生の中から、4年間で本の貸し出しが多かった上位2人にベストリーダー賞として贈ることになっています。



【3月の開館について】

- ・日曜日と春分の日(20日)は休館です。
- ・3月中は9時から17時までの短縮開館です。

◆問い合わせ

名寄市立大学図書館 ☎01654@7671(直通)

大学図書館にはこんな本があります ～「知」への誘い～からもう1歩～

- 日本の年金制度に関する図書を紹介します。
- 『日本公的年金政策史』 矢野聡/著 ミネルヴァ書房
 - 日本の年金制度の確立と変遷過程をたどる政策史の研究書です。
 - 『日本の年金』 駒村康平/著 岩波書店
 - 国民年金・厚生年金の現状を解説し、課題を明らかにしています。
 - 『負けてたまるか車椅子(障害とともに生きる10)』 八代英太/著 日本図書センター
 - 障害者政策に尽力した日本初の車椅子議員、八代氏の初当選までの記録です。

